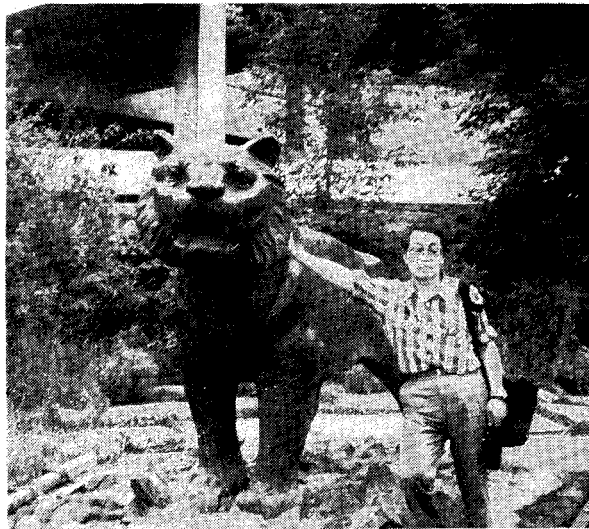


会長就任にあたって

藤巻 裕蔵

さきごろ行われた会長選挙で次期会長に選出され、1998年1月から2年間会長をつとめることになりました。本来であれば、新潟大会の総会のさいにごあいさつすべきところでしたが、昨年から計画していたシマフクロウに関するシンポジウムと日程がかさなり、総会には出席できませんでした。ここで会員のみなさんにお詫びするとともに、就任のごあいさつをしたいと思います。

鳥学会は、森岡会長のときに会則や会の機構の改革を行いました。続く山岸会長のときには、会長の直接選挙、常任評議員会制など、改革後の会の運営を軌道にのせ、同時に鳥類保護委員会を発足させ、鳥学会としても鳥類保護の問題にとりく



んできました。また将来計画ワーキンググループを発足させ、鳥学会の将来の方向についても検討を始めたところです。この他にも前会長の「ごあいさつ・パートⅢ」にありましたように、会の活動として重要なものは他にもありましたが、私の仕事は、これらの学会活動ひきつづき発展させることにあると考えています。

学会活動の中でも重要なのは、なんといっても会員諸氏の研究成果の発表でしょう。学会誌は学会の重要な顔の一つです。中村編集委員長をはじめとする編集委員諸氏の努力により、学会誌は同一巻の年内完結に近づいてきました。しかし、完全に年内完結を実現させるためには、これまで以上に会員皆さんの積極的な投稿が必要です。毎年大会における発表はかなりの数になりますが、これが学会誌への投稿にむすびつかないのは非常に残念なことです。よく、「鳥学会は敷居が高い」という話を聞きます。たしかに、日本の鳥類研究者が集まった唯一の団体の機関誌である以上、それなりのレベルを維持する必要があります。しかし、このことはレベルに達しない論文を受付けないということの意味するものではありません。編集委員や校閲者もできるだけよい論文になるような建設的な注文をつけ、編集委員会としても大会のさいに論文作成に関する相談室を開いてきたところです。これも投稿論文のレベルアップを考えてのことです。これまでいくつも論文を学会誌に発表したような研究者が投稿した場合でも、校閲者の注文なしに受理ということはまずありません。校閲制度に慣れてない人にとって、敷居が高

巻頭言

く感じられるかもしれませんが、校閲は必ず通過しなければならない門だと考えてください。

引き継いだことの中に、日本鳥類目録の出版があります。目録編集委員長としても、任期中に鳥類目録6版を完成させたいと考えています。しかし、目録を完成する上で、会員諸氏の協力が必要とする事項がまだ残っています。それは、目録の中から”検討中の種・亜種”をできるだけ少なくすることです。さきごろ公表した「日本産鳥類リスト」では、”検討中の種・亜種”にした理由の一つとして「論文として公表されていない」ことをあげています。これは、目録に採用する以上、その根拠となる論文が必要という意味で、決してその”検討中の種・亜種”の記録を学会として将来にわたって認めないということの意味しているわけではありません。前述の学会誌への論文投稿の件とも関連しますが、日本における新記録に関する報告をぜひきちんとした論文として投稿していただきたいものです。

会長として鳥学会の発展にできるかぎりの努力をする所存ですが、会員の皆様のご協力をよろしくお願いいたします。
(帯広畜産大学野生動物管理学研究室)

関連学術会議

- | | |
|---------------|---|
| 1998年1月21～25日 | 太平洋海鳥会議（モンテレー、カリフォルニア）
問い合わせ Mike Parker mike_parker@mail.fws.gov. |
| 2月4～6日 | 都市の鳥害管理（カーディフ・ウェールズ） |
| 3月26～29日 | 日本生態学会第45回大会（京都大学） |
| 4月6～12日 | 1998年度北アメリカ鳥学会（セントルイス・ミズーリ） |
| 5月13～16日 | 国際シンポジウム「エコツーリズムと島の鳥」
（東京都・三宅島） |
| 7月27～8月2日 | 第7回国際行動生態学会（モンテレー、カリフォルニア） |
| 8月16～22日 | 第22回国際鳥学会議（ダーバン・南アフリカ） |
| 8月31～9月4日 | 南極科学委員会生物シンポジウム
（クライストチャーチ、ニュージーランド）
問い合わせ fax: +643-364-2057,
e-mail: scarbio@cont.canterbury.ac.nz |
- なお詳しくは前号の学術情報案内を参照してください。

掲示板

募集

鳥学ニュースの前号でもお知らせしましたが、立教大学理学部の大学院修士課程入試は後期（2月）もあります。また4月から博士課程が発足するので博士の入試もあります。博士課程には社会人入試枠があり、専門科目免除（英語のみ、辞書持ち込み可）です。詳しくは

〒171 豊島区西池袋3丁目 立教大学・入試課にお問い合わせください。

(上田 恵介)

第25回国際動物行動学会に参加して

天野一葉

1997年8月20日から27日にかけて、オーストリアのウィーンで「第25回国際動物行動学会(The XXV International Ethological Conference)」が開催され、約660題の発表があった。講演数から判断しても、1000人以上の参加者がいたのではないかと思う。ヨーロッパの学生達が多く参加していたようであり、あらためてヨーロッパ文化圏というか大陸の層の厚さを感じた。演目は大きく九つに区分されており、(1)行動の遺伝的、生理学的メカニズム9.7%(2)情報の獲得とプロセッシング14%(3)コミュニケーション13%(4)種間、種内相互作用9.4%(5)空間と資源の利用10%(6)性行動と繁殖24%(7)社会性6.4%(8)進化的プロセス：個体から個体群へ3.5%(9)人間と行動の応用面10%であった。研究材料の動物も魚、昆虫、鳥、は虫類、両生類、哺乳類、人などと多岐に渡っていた。行動学会自体に参加するのが今回初めてだったことや語学の修行がたりないこともあり、様々な分野の研究の全体を把握するのは困難であったが、私が興味深く感じたのは(3)では音声によるコミュニケーションの発表がとても多かったこと(ノイズの多い環境でのペンギンの個体識別など)、(6)ではレックにおける資源の役割とコミュニケーションの機能についての7題、(7)では動物の幸福についてのプレナリー講演があったこと(快適な飼育に必要な条件などを挙げていた)などであった。

発表形態で分けると、口頭発表28%、ポスター30%、ポスター&トーク27%、シンポジウム10%、プレナリー他5%の割合であった。口頭発表、ポスター、ポスター&トークでの発表数を大体均等に割り振ったようで、申し込んだ発表形式と違う形式に変更された人もいたようである。私はポスター&トークに申し込んだのだが、毎日1時間ポスター&

トークのための時間が用意されており、二枚のスライドを使って二分間講演の要旨を話すことができた。二分間という時間はとても短いですが、短時間で沢山の人の講演要旨を見たり、聞いたりできて面白かった。日本鳥学会大会でも、沢山興味深いポスターがあっても時間内に全部見ることがいつも出来ないでいるので、このような形式を取り上げるとポスター発表がもっと有意義になるかもしれない。写真コンテストも会場で開かれており、いつも観察している動物ならではの様子が写し込まれているようだった。

私が参加したNationalpark Neusiedler Seeへのエクスカージョンでは広い湿原でAvocetやSpoonbillなど沢山の鳥を観察したり、センターで動物のビデオを鑑賞したり、数名の参加者と話をする事ができた。その後、ウィーンにあるコンラートローレンツ研究所を見学することも出来た。ローレンツ研究所には、室内と野外に沢山の鳥のケージがあり、Keaやカナリアなど数種類の鳥を飼育していた。特にカナリアの飼われている2~3階分が吹き抜けになった大きな部屋にはガラス窓が沢山ついていて、色々な角度から観察出来るようになっていた。飼育小屋のゲージには木や草などが入れてあり、自然な感じで飼育されているようであった。また、室内に大きな水槽もあり、シクリッドなどが飼われていて、ここから数々の実験が生まれるのか、という気持ちで眺めていた。

ちなみに次回の国際動物行動学会は1999年8月2~9日、インドのバンガロールで開催される。高原地帯の涼しいところらしく、豪華なホテルを会場にするようである。

(九州大学比較社会文化研究科自然史)

鳥学会新潟大会に準備する側として参加して

本村 健

日本鳥学会新潟大会は1997年9月19日～22日に新潟大学農学部において行われました。9月19日に各種委員会・自由集会、9月20日に一般講演・総会・懇親会、9月21日にポスター発表・特別講演・一般講演・自由集会が開かれ、9月22日には新潟市民プラザにおいて公開シンポジウム「希少猛禽類の管理」が、9月22～23日には佐渡と新潟市周辺においてエクスカージョンが行われました。

日本鳥学会新潟大会準備委員会のメンバーは総括から各係まで、学会開催の経験が全くない大学院生や学部生でした。渉外・会場、会計、プログラム、シンポジウムの各係にわかれ、それぞれの仕事にとりかかりました。

今回の大会準備の大きな反省の一つに、大会当日のシュミレーションを含め大会準備計画が甘かったことがあります。準備計画不足の症状は、自分たちの研究データ採りで忙しくなりはじめた夏前から現れ、各係間の理解や連絡不足から仕事がある人に偏ったりするなどの事態が生じました。しかし他人のミスをカバーしあうなど前向きに仕事をこなし、準備が予定から遅れないよう努めました。また、鳥類関係の研究を行っている地元の研究室の学生もふるって発表や自由集会を行いました。大会準備の忙しさから発表準備が満足に行えず納得のいく発表ができなかった者もいました。これは発表を聴きにきていただいた方々に対して申し訳なく感じています。しかし、だからといって、大会準備や大会当日の仕事をおろそかにして発表準備に集中するわけにもいかず、大会準備計画が完璧であればと今さらのように悔やんでいます。

今回の大会には特別な事項がありました。それは紀宮様が大会に参加されることとでした。紀宮様に対してはなるべく他の大会参加者と同じように対応することが大会委

員長から伝えられました。会場に特別席をもうけたことなど、少なからず批判を受けたこともありましたが、これは紀宮様への対応の仕方というよりも、当日参加の人数があまりにも多かったことに原因がありました。このような事態を起こさないためにも、大会への参加を希望される方は事前に申し込んでいただくのがよいと思います。大会当日では会場を大きな部屋にうつすなどの急な変更は難しいのです。また、人気のありそうな発表については大きな会場という意見もありましたが、これは発表に優劣をつけるような気がしてできませんでした。宮様目当ての報道陣への対応は厳しく行いました。報道陣によって大会参加者に迷惑をかけたくなかったからですが、会場への入場を断られたある新聞社から「我々は遊びでやっているわけではない」と声高に言われました。もちろん私も大会準備委員も遊びどころかバイトでもなく、ボランティアで大会運営にとりくんだわけで（打ち上げの飲み会はありましたが）、こういう発言は私たちにとっては非常に残念でした。

今回の大会では公開シンポジウムをはじめ、社会的に大きな問題になっている猛禽類についての発表が目玉のひとつであったと思います。しかし参加者の一部から「保護管理についての研究はすべきでない」との意見も聞かれ、鳥学と社会が直面している問題との関係が希薄であることを実感しました。研究が社会から隔離された状態がよいとは考えられません。

今回の大会を準備運営するにあたって、大会参加者の皆様に何かとご迷惑をおかけしたこともあったことかと思えます。しかし準備委員会としては、苦勞もありましたが精一杯努力したつもりです。ある参加者からは「今回の大会では学生さんに変な親切に対応していただいた」という嬉しい意

見も頂きました。これは大会を支えた多くの学生達の“大会を成功させよう”という純粋な心によるものだと思います。

(新潟大学自然科学)

掲 示 板

セミナー紹介

〔北海道鳥学セミナー〕

このセミナーは北海道大学と帯広畜産大学が中心となり1994年から行われています。年に2回、冬（11月下旬）と春（3月上旬）に道南または道東地方で、2日間にわたって様々な研究発表が行なわれます。また、研究発表だけでなく、事例報告や話題提供など、参加者の意志を盛り込んだ自由な形式で行っています。あるテーマに絞ってシンポジウムもあわせて開催することもあります。北海道で鳥類を研究している人なら誰でも参加することができますので、興味のある方は参加してみてください。

なお、次の鳥学セミナーは北海道大学が事務局となって3月上旬に行われる予定です。詳しい情報のお問い合わせは

北海道大学地球環境科学研究科・生態環境科学専攻地域生態系学講座

〒060 札幌市北区北10条西5丁目 TEL:011-706-2267 shige@ees.hokudai.ac.jp

角谷栄政 または

帯広畜産大・野生動物管理学研究室

〒080 帯広市稲田町西2線11 TEL:0155-49-5115(5503) iwami@obihiro.ac.jp

岩見恭子 まで

事務局からのお知らせとお願い

会員のメーリングアドレスリストについて

会員の方から会員への緊急の連絡の際に、会員のメールアドレスリストがあれば便利ではないかというご意見を頂きました。

特に指定はしていませんが、今回の寄稿はすべてメールで行われました。小さな記事でも、会員の方にとって欲しいと思う情報を気軽にお送りいただけるのではないかとおもう、メール原稿も（もちろん郵送、ファックスも大歓迎です）歓迎したいと考えています。会員のメールアドレスリストあればと思います（ニュース担当綿貫）。

事務局または編集委員会からの会員への連絡にE-mailを活用したいと考えています。この趣旨に賛成の方は、事務局にメールアドレスをご連絡ください。

連絡は事務局・藤巻裕蔵 (fujimaki@obihiro.ac.jp) あてにお願いします。また、会員のなかからも、会員名簿にメールアドレスを掲載してはとの要望があります。この点については、会誌46巻3/4号に掲載予定の会員名簿では間に合いませんが、評議員会で検討したいと考えています。

[事務局から]

>>>お尋ね<<<

星 幸博, 大坪瑞樹, 大槻都子, 鈴木悌司, 東方書店輸出部

以上の方は住所が不明となっております。住所変更をされてる方はお知らせください。

>>>案内<<<

会費を銀行振り込みされる方へ

帯広信用金庫 稲田支店

日本鳥学会 会長 藤巻裕蔵 普通口座 0216010

会費の銀行振り込みにはこの口座を利用してください。

新事務局員から

庭の餌台に夜、餌を置き昼近くに起きるとすでに空という有閑主婦生活を見込まれ事務局員になりました。今後ともよろしく願いいたします。(柳川 明里)

鳥学ニュース編集担当より

今回からニュース担当が変わりました。役に立つ情報をどんどん載せたいと思います。学術会議案内に加えて、鳥学会員に広く知らせるのが良い情報(小集会、講習会、調査員研究者募集、研究フィールド情報など)の掲示板をつくります。発行日の2ヵ月前までにお知らせください。また、原稿依頼があったときは快くお引く受けくださいますようお願いいたします(綿貫)。

ニュース編集のお手伝いをさせていただくことになりました。慣れない仕事ですが、編集長の足を引っ張ることの無いように頑張りたいと思います。(岩見)

原稿送り先

〒060 札幌市北区北9西9 北海道大学農学部応用動物 綿貫 豊

TEL: 011-706-3690, FAX: 011-757-5595

E-mail: ywata@res.agr.hokudai.ac.jp (メールでの原稿も歓迎します)

鳥学ニュース No.66

1998年2月1日 発行 (会員配布)

発行 日本鳥学会

〒080 帯広市稲田町西2線11 帯広畜産大学 野生動物管理学研究室気付

TEL. 0155-49-5500 FAX. 0155-49-5504 郵便振替口座 00110-0-6599

発行人 藤巻裕蔵

編集 綿貫 豊